



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3800号 2017.7.27 発行

「人に迷惑かけていい」40年前のドラマにいま、共感

NHK ニュース 2017年7月26日
「人に迷惑をかけることを怖れるな」

40年近く前のテレビドラマのせりふです。いま、この言葉が静かな共感を呼んでいます。ドラマは、山田太一さんが脚本を手がけた『男たちの旅路』シリーズの『車輪の一步』。身体障害者に対する当時の社会の厳しい現実を正面から描いた作品で、このせりふは、主役の俳優が周囲に遠慮しながら暮らす車いすの青年を励ますシーンで使われました。



このドラマ、今の時代に何を問いかけているのか。山田太一さんや、車いすの男性を演じた俳優の斉藤洋介さんに話を聞きました。(ネットワーク報道部 野町かずみ記者)

「人に迷惑をかけること怖れるな」

今ほどバリアフリーが進んでいなかった昭和54年に放送された『車輪の一步』。どう生きるべきか悩む車いすの青年に対して、主役のガードマンを演じた鶴田浩二さんは、優しく諭します。

「『人に迷惑をかけるな』という社会が一番疑わないルールが君たちを縛っている。君たちは、普通の人々が守っているルールは、自分たちも守るといってもいいかもしれない。しかし、私はそうじゃないと思う。君たちが、街へ出て、電車に乗ったり、階段を上がったたり、映画館へ入ったり、そんなことを自由に出来ないルールはおかしいんだ。いちいち後ろめたい気持ちになったりするのをおかしい。私はむしろ堂々と、胸を張って、迷惑をかける決心をすべきだと思った」

そして、人に助けてもらうとき、節度は必要だ。しかし、毎回、世話になったと傷つく必要はない。元気な人が少し手伝うのは当然で「迷惑をかけることを怖れるな」と力強く語りかけます。

静かな共感広がる

ここのところ、航空機への搭乗拒否をはじめ障害者が関係したニュースが報じられ、その度に、この言葉やドラマが引き合いに出されて「昔と何も変わっていないじゃないか」という議論がネットで見られます。

去年、相模原の事件が起きたときは。

「迷惑を掛けてはいけないという道徳を追い詰めていくと人に迷惑を掛ける人間は抹消しても良いに繋がっていく」

先月、航空会社が車いすの人の搭乗を拒否した問題では。

「バラエティの一連の騒動を見て『車輪の一步』を思い出す。初放送から40年近くもた

つのにほとんど進歩していない」

「車輪の一步を見た世代としては「必要な迷惑はかけるべきだ」という思いが強くある。

あのドラマの衝撃は相当だった」

今の時代だからこそ、若い人に見てほしいという声も数多く上がっています。



障害者の暗い現実を描いた異色作

『車輪の一步』は、バリアフリーが今ほど進んでいない時代に、障害者の問題に真正面から向き合った異色の作品で、数多い山田太一さん脚本のドラマの中でも、名作中の名作とされています。

冒頭は、車いすの青年のグループが一般人の通行をわざと邪魔して公共の場所を占拠、鶴田浩二たちガードマンを困らせるという意外な展開で

始まります。

1人では電車やバスに乗れず、タクシーには乗車拒否され、アパートも貸してもらえない車いすの人の悩み。その現実を目のあたりにした鶴田さんらは青年たちを手助けするようになります。

車いすの青年を演じた斉藤洋介さん（66）は、車いすを理由に風俗店への入店を断られ、両親の前で号泣する難しい役を演じ、強烈な印象を残しま



した。

車いすの役の6人は、斉藤さんも含め、当時は無名の俳優ばかり。顔が知れた俳優だとリアルさが出ないからとの抜きて、斉藤さんらは体当たりで演じたと、当時を振り返ります。

「腕の力だけで階段を上がる演技など本当に大変で、演技を通して、その不便さを身にしみて感じ、素直な演技ができました。川崎の風俗街に車いすで行くシーンでは、撮影中、本物のやく

ざに取り囲まれて『なんだ、オメーこんな所来やがって』とすごまれて。わからなくて、そのまま演技を続けて、その様子がそのまま放送されました。リアリティのある演技と言うより、現実そのものだったんです」

ラストシーンは、今のようにエレベーターやスロープもない駅の階段。障害があることで引きこもりがちだった車いすの女の子が、周りの人たちに対して、勇気を振り絞って、「どなたか…私を上まで上げてもらえませんか」と、大きな声で叫びます。

「人に迷惑をかけていい」山田太一の思い

ドラマにはどのような思いが込められているのか。

脚本を書いた山田太一さん（83）は、当時の対談の中で次のように答えていました。

「人間の生き方の中には、迷惑を掛けてもこのことはやらなければいけないということがいっぱいある。募金にしても署名活動にしても、それは人の迷惑を考えたらやれないので

す。単に身障者の話と言うことでなくて、もう少し普遍的なものを裏側に用意したつもりです」



山田さんに障害者をめぐる最近の状況やドラマのことについて、改めてお話を伺いたいと思い、自宅を訪ねました。

――まず、先月、航空会社が車いすの人の搭乗を拒否した件について聞いたところ、ニュースで知って、驚いたという答えが返ってきました。

「あのドラマから40年近くたっているのに、そんなことをいまだにしているのかとショックを受けました。小さいとは言え、公共の交通機関なのだから。この40年でハード面では大きくは変わったことは事実だけど、世の中はそう簡単には変わらないと思いました」

――そして、「迷惑をかけることを怖れるな」というセリフについて聞くと。

「3年間にわたって車いすの人たちとつきあい、大変な苦勞をしている日常に接する中で到達したものです。彼らは、とても大きなものに縛られていて、あそこまで露骨に言わないと、世間にわかってもらえないと思いました」

――『迷惑をかけることを怖れるな』という言葉が共感を呼んでいることについて。

「現実が、そうじゃないからこそ、こういう言葉を必要としているのでしょうか。障害者ではない人で、他人事だと思っても、実は、形を変えて自分の問題になっているなど感じている人が多いからではないでしょうか」



なぜ今 共感が

このドラマのメッセージに共感が広がっているのはなぜなのか。ドラマのほかの関係者にも聞きました。今でも折に触れてドラマを見返すという俳優の斉藤洋介さんは、今でもこのドラマが繰り返し思い起こされる理由として、「忙しい社会の中で、本来、人間が持っていなければならない『優しさの魂』みたいなものを思い出させてくれるからではない

かと感じている」と話しました。

また、ことし1月、『車輪の一步』を含むシナリオ集を出版した里山社の清田麻衣子さんは「あのせりふは、容易には社会が乗りこえられない。でも、こうありたいとみんなが思う1つの指針なのではないか」と話していました。

私は数年前にこのドラマに初めて接しました。車いすから降りた人がはうように階段を上る場面や障害者の性の問題、障害者の親の思い。知らなかったことばかりで、その生々しさに目を開かされる思いでした。

放送からおよそ40年。この間、ハード面ではバリアフリーが進み、車いすの人も積極的に外に出るようになっていますが、全員が同じように不自由なく暮らせているとは言えません。車いすの当事者に聞いてみると、逆に、多くの人が電車では、障害者は駅員に任せればいいやと思うようになるなど、ふれあいが少なくなっている側面もあると言います。健常者が、駐車場の障害者用のスペースに車を止めたり、多目的トイレを長時間使うなど、無理解や無関心から来る行為もあとを絶ちません。そして、障害者に限らず、シングルマザーや老老介護など、人に遠慮してなかなか助けを求められない人たちは、実は、今の時

代にも多くいます。

社会的なゆとりが失われるなか、自分がいつ同じような「社会的弱者」になってもおかしくないという実感が、共感となって広がっているように思います。「迷惑をかけることを怖れるな」、この言葉を知っているだけでも、無関心から解放されて少しだけ優しくなれるかもしれない。そう思いました。

障害者殺傷事件1年 初めて遺族が語った思い

NHK ニュース 2017年7月26日

去年7月、相模原市の知的障害者施設で19人が殺害され、27人が重軽傷を負った事件から1年がたちました。逮捕・起訴された施設の元職員の植松聖被告は「意思疎通がとれない障害者は生きていてもしかたがない」などと供述し、社会に大きな衝撃を与えました。この事件で警察は遺族への配慮だとして、犠牲者を匿名で発表する異例の対応を取りました。また遺族たちも取材に思いを



語ることはほとんどありませんでした。しかし1年がたった今月、3組の遺族が私たちのインタビューに答えたり、手記を寄せたりしてくださいました。私たちが遺族から受け取った、大切な家族への思いをお伝えします。(社会部 松井裕子・三浦佑一)

父親“思い出さない日はない”

「写真を提供します」

今月中旬、記者の携帯電話にかかってきた見知らぬ番号からの1本の電話。事件で亡くなった35歳の女性の父親からでした。1年間、通ってもなかなかお会いできなかつた方からの突然の連絡に驚きつつ、自宅を訪ねました。そして、初めて入れていただいたリビング。父親は生前の娘を写した11枚の写真を示しながら娘のことを語り始めました。



「この1年間、娘のことを思い出さない日はありませんでした。風呂に入れば『一緒に入ったな』、ひげを剃っていると『こんな時に寄ってきて、足をトントンたたいてだっこをせがんでいたなあ』。ふとしたことで思い出し、嗚咽します。いちばん思い出すのはだっこした時に妻のほうを向く姿です。得意そうにするんですよ。『勝ったよ。父は私のほうが好き

なんだよ』という様子で。めちゃめちゃかわいかったです。でも事件の3週間ほど前、やまゆり園で最後に娘と会った際にだっこしてあげられなかったことが今でもずっと心残りです」父親はかすれた声で声を振り絞るようにそう答えてくれました。

“犯人の気持ちは考えたくない”

事件を起こした植松被告のことについて尋ねると



「犯人が津久井やまゆり園で起こした事件と、自分の娘の死が、私の中で全く結びつかないんです。理由は私にもわからない。娘が亡くなったのは施設に預けた自分のせいだと、



今も思っています」

と話しました。そして

「裁判を見届けたいという気持ちも特にはないです。法廷で犯人の言葉を聞いたところで娘が戻ってくるわけではありません。犯人の気持ちは考えたくもないですし、やったことの実実は事実として、裁判所に判断してもらえればと思います」

と淡々と話しました。

そして、自身が末期の肺がんであるこ

とを明かしました。

「事件以来、毎日遺影にコーヒーを供え、ごめんねと語りかけてきました。私はあと何か月生きられるのかわかりません。娘には『もうすぐ行くよ、行ったらだっこしてやるよ』と言葉をかけています。娘が亡くなったことで、私には思い残すことはもうないのです」

兄 “犯人が言ったことは違う”

女性の兄も取材に答えました。

「僕が小学生の頃から妹は『長く生きられない』と『奇跡が起きない限り20歳は越えられない』そういう話をずっと聞いていました。『次に発作が起きるともうだめだ』と母がよく話し妹の命は常に気がかりでした。でも、妹は30歳を越えたのです。妹は人よりもちょっと短いかもしれないけれども、老衰という形で命をまっとうすると信じていました。それが最後、ありえないでしょう」

そして植松被告の言葉に対しては強い口調でこう話しました。

「犯人に妹のことを分かってほしいとは思いません。ただ『意思疎通ができない人』というのは違います。妹は家族みんながコミュニケーションがとれ自己主張の強い妹でした。『コーヒーが飲みたい』と甘えてきて、あげれば『まずい』と言う。よければ『まあいいんじゃないか』って表情をしました。意思の表示はしっかりできていました。犯人が言っていることは、僕にはさっぱりわかりません。今後どんな話をしようか、納得も理解もできないと思います」

母親 “今もそばにいるよう”

26歳の娘を失った母親も娘への思いを静かに語りました。

「今も娘がそばにいるような気がし



て、出かけるときは娘の遺影にいつくるねと言い帰ってきたらただいま、きょうはこんなことがあったよなどと声をかける毎日です」

母親は事件のあと、娘の成長をつぶさに記録してきた写真を見ながら、26年間を振り返ってきました。

「親ばかかもしれませんが、二重あごになっている写真もかわいいです。好きな写真を並べて成長をたどっていると涙が出てきます。娘が大好きだったんです」

母親は夫の病気や親の介護が重なり、自身も体調を崩して長期入院したため、やむなく娘を津久井やまゆり園に預けました。頻繁には会いにいけない中で、施設から届く便りに記された娘の様子をメモに書き留めて大切にしてきました。そこには、納涼祭でじんべいを着せてもらったことや、山梨に行つてぶどうをおいしそうに食べ、笑顔が多く見られたことなどが記されています。



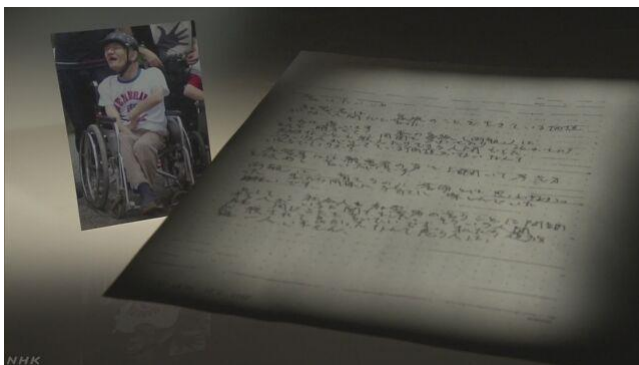
母親はいまの心境を、こう語りました。

「今は少し落ち着いているのですが、少し前は本当に私もそっちにいきたいと思っていました。でもあまり、泣いてばかりいると娘が『お母さん、頑張つて』と言うような気がして、一生懸命生きています」

「**いらない命はないのです**」

手記も寄せてくれました。ご紹介します。

「娘の事を思い出さない日はありません。よくそばによりそつて甘えてきたね。そんなあなたと共に一緒に歩いて来ました。今、思うと、もっといっぱい遊んであげれば良かった。もっと思いをわかってあげたかった。心残りがいっぱいあります。娘の好きだったスピッツの『チェリー』のCDを探しに行くと店頭アイドルの横にならんでスピッツのヒット曲がかざられてあり、まるで娘が導いてくれたかのようなのでした。たまにかけて娘と一緒に聞いています。キラキラした瞳で多くの人に安らぎを与えてくれ、いろんな人に力をくれ

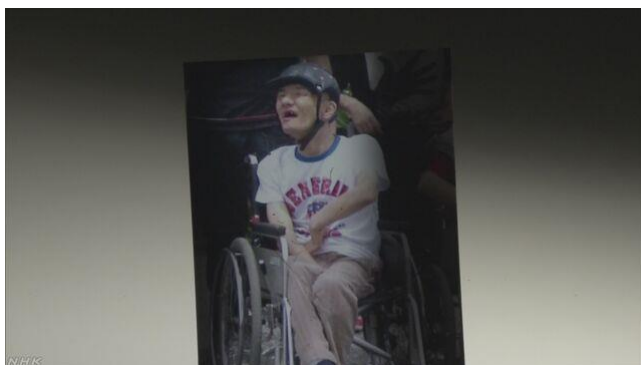


愛されていたのに、何でこんな事になってしまったのか。あまりにもひどすぎる。障害を持っているのはとても大変だけれど、望んで障害者になったわけではない。偏見を持たないでほしい。障害者がいやでもいらない命はないのです。けつして傷つけたり殺してはならない。絶対に」

「**思い出したくないけど、忘れてほしくない**」

55歳の男性の家族も手記を寄せてくれました。そこには

「加害者は私の家族を生きている価値がない人間だといったがそれは違います。とても明るくて周囲を笑わせたり泣かせたり大切なことを教えたりできる人間でした。こういう人が生きている価値がないなんていえるのでしょうか。私たち遺族に殺されてよかったなんて思う人は誰一人いません」



と綴られていました。

男性は喜怒哀楽が豊かで、言葉で表現するのは苦手でも声のトーンを使い分けて気持ちを伝えてくれたといいます。また、一度覚えたことは忘れず、家族の誕生日が来ればカレンダーを指さして「きょうだね」というように教えてくれたということです。

匿名を希望してきた理由について

「さらに差別を受けるのではないかと怖かったからです。事件後、長年つきあいがあり兄のことも知っている近所の人に『事件があったことは悲しいけど、でもよかったんじゃない？』と言われたことが悔しくて、そう思う人がいるのならばと思いました」

と話しました。そして今の心境について次のように話しました。

「被告に対してはずっと許せないという思いが続いています。被告が『障害者は生きる意味がない』『社会の役にたたない』と言い、インターネット上でそれに同調する人たちがいましたが、それは絶対に違う。兄にたくさん助けてもらったし私たち家族は障害を理由にそんなことを考えたことはありません。もうあの事件のニュースはあまりやってほしくない。でも二度と同じような事件が起こらないように障害者のことは伝え続けてほしい。思い出さたくないけれど、忘れてほしくない、それが今の気持ちです」

遺族の思いを受け取って

今回、遺族が話してくだっただのは悲しみが癒えたり現実を受け止めたりできたからではないと思っています。命を奪った植松被告の言葉ばかりが社会に伝わっていく中で「家族は一生懸命生きていた」「かけがえのない存在だった」ということを知ってほしいという思いからだと思っています。1年をかけて語られた言葉の重さ、その深い痛みを受け止め、これからも事件と向き合っていきたいと思っています。

社説：相模原事件1年／差別を容認しない社会に

神戸新聞 2017年7月27日

神奈川県相模原市の知的障害者施設で入所者19人が殺害された事件から、きのうで1年になった。施設に侵入し、無抵抗の人たちを次々に襲った犯行は、社会に大きな衝撃を広げた。

殺人罪などで起訴されたのは施設の元職員の男だった。今も謝罪の言葉はなく、「障害者は不幸をつくる」といった自身の考えを正当化している。

障害者を介護する立場の若者がなぜ、障害者を排除するという差別思想に染まったのか。大量殺人を実行するに至った動機は何なのか。核心はいまだ深い闇に包まれている。

大切なのは、差別を決して許さないという意識を社会全体でしっかり共有することだ。

この事件では、殺害された人のほかに26人が重軽傷を負い、3人が結束バンドで縛られた。未明の時間帯を狙った犯行は高い計画性をうかがわせる。

被告は犯行の5カ月前に衆院議長公邸を訪れ、襲撃を示唆する手紙を渡そうとした。手紙には「障害者が安楽死できる世界が目標」と書かれていた。

職場でも同様の発言を繰り返して警察に通報され、市が精神保健福祉法に基づき措置入院を命じた。だが退院後は警察と行政の連携がなされず、継続して見守る仕組みが必要とされた。

事件は裁判員裁判の対象で、これから公判前の手続きに入る。被告の責任能力の有無が争点になることは間違いない。

ただ、被告は一環して容疑を認め、「意思疎通ができない人間を安楽死させるべきだ」とする主張を崩していない。精神鑑定で人格的な問題が指摘されたが、検察は「責任能力に影響しない」として起訴した。審理は長期化するだろう。

「いつも家族と新年を迎えていた」「とても我慢強く笑顔がすてき」ー。犠牲者の追悼式では一人一人の人柄が紹介され、遺族らは事件に対する憤りと悲しみを新たにした。

気になるのは、被告の過激な主張を容認するような言動がネットなどで見られることだ。

障害のある人もない人も命の重みに変わりはない。地域で共に生きている。そうした当

たり前のことに対する意識が薄れていないか、改めて自分や周囲の状況を見つめ直したい。

相模原事件1年 家族の愛が生きる力 癒えぬ心の傷 毎日新聞 2017年7月26日



相模原市の障害者施設殺傷事件で顔や首を切られる被害を受けた女性。妹と面会する兄が優しく頬にふれた＝横浜市港南区で2017年6月28日、長谷川直亮撮影

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」を襲った未明の惨劇から1年が過ぎた。妹や娘を傷つけられ、その惨劇を乗り越えようと精いっぱい愛情を注いでいる二つの家族の話聞いた。

6月下旬、やまゆり園が移転した横浜市にある仮園舎の一室で、兄（52）と妹（46）

が笑い合っていた。妹は重度の知的障害があり、言葉での会話は無い。手を握り合ったり、顔に触れたりしているだけだが、緩やかな時間が流れた。

1年前の7月26日、兄が病院に駆けつけると、人工呼吸器をつけた妹がベッドに横たわっていた。顔と喉に傷を負い、目の焦点が合わずもうろうとしていた。ベッド脇には血だらけの服があった。

3日目。意識が戻った妹がベッドから兄に向けて「あ、あ、あ」と言ってほほ笑んだ。今まで見たことのない穏やかな表情だった。「心配しないでと言っているようだった。あの顔は一生忘れられない」と振り返る。

退院後、妹は園へ戻った。兄は、高齢で訪問できない両親の分も兼ねて月1回のペースで面会に通う。スナック菓子をうれしそうに食べる顔、肩を組んだ時に自分を見上げる顔。妹のふとした表情にいつも涙がこぼれる。「生きていて、本当に良かった。生きていれば笑い合える」

妹の園での生活は約20年になる。事件前には、散歩中の妹が園の近くに住む元職員の家に上がり込み、戸棚から食パンを出したことがあった。元職員は「いらっしやい」と言ってパンを焼いてくれたという。「地域が妹を受け入れ、育ててくれた。にこにこ暮らせる元の場に戻してあげたい」。兄は祈る。

25歳からやまゆり園で過ごす野口貴子さん（46）は、首を刺され大けがをした。「娘は事件後、服や目を触るようになり、なかなかじっとしていられなくなった」。事件から1年がたち、初めて毎日新聞の取材に実名で応じた貴子さんの父宣之さん（77）と母輝子さん（77）＝神奈川県藤沢市＝は、いまだ癒えぬ傷を語る。

貴子さんは2歳のころに自閉症と分かった。意思を言葉で伝えることができない。約5年前からは白内障を患い、目もほとんど見えなくなった。夫妻は「甘えてきて、お父さんにチュッてしてくれることもある。私たちの分身だから、かわいいよ」と愛情を注ぐ。

子どものころには、銀行員だった宣之さんの仕事の合間に家族旅行によく出かけた。水遊びが好きな貴子さんを連れて江の島で海水浴もした。ピアノが得意な輝子さんの演奏に合わせ、「きよしこの夜」をハミングする姿も目に焼き付く。

貴子さんは今年6月、3泊4日で一時帰宅し、家族でウナギを食べた。温かい時間を取り戻し始めている。

夫妻は「うちの娘は生き延びたけれど、亡くなった人もいる。裁判を早く始めてほしい」と願う。【宇多川はるか、中村紬葵、杉山雄飛】



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行